



TITLE:

臨床教育学講座2006年度授業科目 一覧

AUTHOR(S):

CITATION:

臨床教育学講座2006年度授業科目一覧. 臨床教育人間学 2007, 8: 181-186

ISSUE DATE:

2007-05-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197022>

RIGHT:

臨床教育学講座 2006 年度授業科目一覧

〔学部提供科目〕

■臨床教育学基礎演習Ⅰ（矢野智司）

生物学者ユクスキュルは、生物は同じ世界に属しているのではなく、それぞれの生物種固有の環境に生きていることを明らかにした。このような生物種に固有の環境を、ユクスキュルは「環境世界」と名づけたが、この理論は哲学的人間学のみならずハイデッガーやカッシーラーやメルロ＝ポンティにも影響をあたえたばかりか、ローレンツらの動物行動学を先取りしており、しかもサイバネティックス論の先駆的モデルでもある。ユクスキュルはダニの例をあげている。このダニは全身光覚はあるものの目はなく、耳もなく、味覚もない。感覚器官は哺乳類の皮膚腺から流れてる酢酸の匂いの有無を判別することのできる嗅覚器官、取り付いた獲物の毛のなかから確実に逃げだすことのできる触覚器官、獲物が発する体熱に反応することのできる温度感覚といった人言と比較して限られた感覚器官しかもたない。しかも、この限られた感覚器官で世界を切り取り、限られた情報のみを意味（刺激）として受け取ることによって、ダニは確実に限定された行動を遂行することができるのである。

このユクスキュルの環境世界論を批判的に摂取して、「人間とは何か」について答えようとしたのは、哲学的人間学の創始者の一人シェーラーだった。シェーラーは、「心的諸能力の段階系列」にしたがって、人間を植物層・動物層・精神層の三つの層としてとらえた。人間を特徴づけるのは下部の階層によっては規定されることのない精神層である。シェーラーによると、人間は、ユクスキュルが描いた生き物のようには、生得的な本能によって環境世界につながりとめられてはいない。人間は、環境からの刺激や誘惑にたいして、ばね仕掛けの自動機械のように、ただちにあらかじめ決められた反応をかえすのではなく、精神の能力によって「NO」をいうこともできるのだ。この環境に対して距離をとるという精神の能力において、人間は世界に開かれており（世界解放性）、自由に創造的に生きることが可能となる。ユクスキュルを出発点に人間学の基本的な文献を読んでいく。

■臨床教育学基礎演習Ⅱ（齋藤直子）

題 目：デューイと「生き方としての民主主義」

内 容：20 世紀アメリカの哲学者ジョン・デューイは、「哲学」を「教育の一般倫理」と定義し「教育としての哲学」という見方を提示した。これは、哲学が人間の諸問題の解決のためにあり、理論が実践と相互交流する中で両者が同時に改訂され続けるという「実践哲学」および、民主主義が人々の日々の生活の中で思考と対話を通じて生き方として実現されてゆくという「生き方としての民主主義」の思想と不可分である。本演習では、デューイのテキ

ストに対して、参加者ひとりひとりが、各人の教育に対する問題意識や経験に基づき、対話的かつ批判的に取り組みディスカッションすることを通じて、デューイの「生き方としての民主主義」の思想と言語の今日的意義を語り直し、再発見してゆくことを目指す。特に、デューイによる国家間の「相互理解」の思想や、差異から学び合う「友情」に根ざした異文化間対話の思想を、市民性の教育との関連から批判的に再考する。

評 価：出席、発表、および、レポートに基づく。

■臨床教育学講読演習Ⅰ（齋藤直子）

題 目：大人の教育としての哲学

内 容：「教育」を問う視点と問い方を転換し「哲学」で語られる言葉の役割を問い直すことによって「大人の教育としての哲学」を提唱するアメリカの哲学者スタンリー・カベル（Stanley Cavell）の著作および関連文献の講読を行う。これを通じて「実践哲学」としてのアメリカ哲学の現代的意義および、臨床教育学における教育人間学的アプローチのひとつの可能性を提示することを目指す。カベルの著作『センス・オブ・ウォールデン』、ソローの『ウォールデン』などの原書と邦訳書を対比させて講読する中で、言語を通じた自己変容と社会変容、自己超越と他者性の思想、「有用性」を越える豊かな実践の学としての「生活のエコノミー」、翻訳と異文化理解のプロセスとしての哲学、「解釈の政治学」を通じた市民性の教育、などの多様なテーマの総体として「大人の教育としての哲学」の意味を明らかにしてゆく。

評 価：出席、発表、レポートに基づく。

その他の注意事項：原則として通年履修。テキストを事前に入手。

■臨床教育学講読演習Ⅱ（齋藤直子）

題 目：大人の教育としての哲学

内 容：前期に引き続いて、アメリカの哲学者スタンリー・カベル（Stanley Cavell）の著作および関連文献の講読を行う。

その他の注意事項：原則として通年履修。テキストを事前に入手。

■身体教育学（矢野智司）

鬼ごっこに没頭する子ども、昆虫採集に夢中になる子ども、人形を大切に抱える子ども……。 「遊ぶ子ども」という在り方の不思議さの解明が、本授業の中心テーマである。ここでいう「子ども」とは、普通理解されているように、年齢で区分された人生段階上の一段階のことではなく、人間存在のある様態を指す言葉なのである。この「子ども」という在り方を、最も明瞭に特徴づけている事象は「遊び」である。この「遊び」というありふれた事象のうちに、「子ども」に特有の世界と交流する模倣の力や生命に触れる生の秘密があるのだ。そして、遊ぶことによって子ども特有のコスモロジーを創作することができる。しかし、この

「遊び」は従来の遊戯理論とは異なる地平で理解される必要がある。遊びは、夕霧論の教科書的な記述では、スペンサーやホールからピアジェといった生物学・心理学による実証的な遊び研究の系譜で説明される。授業で問うことになる「遊び」という問題圏の広さと深さは、教育学や心理学によってこれまで見通されることがなく、むしろ教育学や心理学の学的枠組みがもつ関心の狭さから解放されることによって初めてその全体が理解されるものである。それというのも、本授業は、「遊び」を人生における一過的で付属的なエピソードとみるのではなく、その限りない広さと底抜けの深さを肯定し、人間の本質的な事象としてとらえる思想系譜から出発しているからである。この系譜で思いだされるのは、オランダの歴史学者ホイジンガである。ホイジンガの美しく魅力的なテキスト『ホモ・ルーデンス』によってはじめて、私たちはこの遊びという事象の広がりや深さを人間存在の全体性において理解することができるようになったのである。このホイジンガの問題意識の出発点にはニーチェが隠れている。ニーチェのニヒリズム克服という課題が、ホイジンガに遊びという事象の現代的な重要性を発見させることになったのだ。ニーチェから、ホイジンガ、さらにはバタイユやカイヨワの系譜が、本授業における遊びがもつ思想的課題の全体像を示している。このような問いの地平を人間学とよぶことにしよう。遊ぶ子どもの人間学を考えてみたい。本授業は下記のテキストをもとに展開する。

テキスト：矢野智司『意味が躍動する生とは何かー遊ぶ子どもの人間学』世織書房

■臨床教育学専門ゼミナールⅠ（齋藤直子・矢野智司）

題 目：臨床教育学における「教育的意義」の論じ方

内 容：今日の教育は、初等教育から中高等教育、生涯教育にいたるまで、目に見える明瞭な指標によって測ることができるような効果・変化を示す問題解決的発想に取り込まれる傾向にある。そうした「実践」観の中で、「哲学」はますます、「単なることば」、「単なる抽象理論」、「単なる理念モデル」として排斥されてゆく。「実践」と「理論」の乖離の風潮が支配的な今日、教育学、とりわけ、教育哲学や教育人間学など教育理論に携わる学問は、こうした趨勢に抵抗しうる思考の自律性と批判力を保持しつつ、なおかつ「実践」に語りかける言葉を差し出す必要性に迫られているのではなからうか。この要請は、臨床教育学において論文を書くという行為の中で「教育的意義をいかに論ずるか」という問いとも密接に絡んでいる。本演習では、この問いに対する答えを各人が卒論執筆の過程で見いだしてゆく上での手がかりとして、「実践哲学」としてのアメリカ哲学（デューイなどを含む）の文献やイギリスの *Journal of Philosophy of Education*、アメリカの *Educational Theory* など、英米の教育哲学の学術論文を英語で講読する。

評 価：出席、発表、レポートに基づく。

注意事項：本授業は卒業論文の指導もかねているので、本講座で卒業論文を書く予定の学生は必ず受講するように。

■臨床教育学専門ゼミナールⅡ (矢野智司・齋藤直子)

教育人間学の古典とも言えるべき O. F. ボルノウの『教育を支えるもの——教育関係の人間学的考察』をテキストに、教育関係にかかわる諸テーマを考察する。なお本授業は卒業論文の指導もかねているので、本講座で卒業論文を書く予定の学生は必ず受講するように。

[大学院科目]

■臨床教育学研究Ⅰ (矢野智司・齋藤直子)

臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典的文献を幅広く精力的に読み論文指導を行う。また、博士論文作成に向けての指導を行う。

■臨床教育学研究Ⅱ (矢野智司・齋藤直子)

臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典的文献を幅広く精力的に読み論文指導を行う。また、博士論文作成に向けての指導を行う。

■臨床教育学演習Ⅰ (矢野智司・齋藤直子)

「教育愛と贈与の教育人間学」

「教育愛」は教育関係論のなかの中心主題の一つで、教育において教える者が学ぶ者にたいしてもつ愛の在り方を示すものと考えられてきた。しかし、1970年代になって、このような教育愛とはつまるところ大人による子どもへの精神的肉体的暴力を隠蔽するためのものにすぎないのではないかという批判が、旧西ドイツなどを中心に展開され、そのため教育学でも論じられることが少なくなった。またヒューマンイズムの衰退は、「愛」という言葉の力を衰退させることになり、教育に限らず看護や社会福祉にいたる人間のサービス（ケアリング）に関わる全領域で忘れさせられようとしている。確かに教育愛のもとに暴力がまかり通り、また教師にたいして過大な義務を課してきたことは間違いない。しかし、教育関係のなかには、たんなる交換や役割に還元することのできない無償の贈与の次元があることも事実である。近年の「贈与論」の進展はこのような教育関係を新たにとらえ直す可能性を秘めている。教育愛と贈与についてのテキストを手がかりに考察を深める。

■臨床教育学演習Ⅱ (矢野智司・皆藤章・大山泰宏)

「臨床知における愛の臨床教育学」

この授業では臨床教育学演習Ⅰの課題を継続して考察する。教育のみならず、看護や福祉といった人間へのサービスにかかわる領域で、教師や看護師の仕事を「感情労働」といった用語でもって論じられ始めている。感情労働の理論では無償の贈与性は退けられ交換として捉えられるのだが、それで本当によいのだろうか。臨床教育学Ⅰでの議論を踏まえて、臨床知という視点から、教育愛・ケアリング・感情労働・エロスなどの概念にまで対象を広げ、かつ教育に限定せず心理臨床や看護や福祉での議論も踏まえ、広く臨床知の課題として考察

を深める。

■学校臨床学演習（矢野智司・皆藤章・桑原知子）

本演習の受講にあたっては、守秘義務などの倫理規定の遵守を必要とするため、受講希望者はあらかじめ担当教官（皆藤章）の了承を得なければならない。

基本的に、受講者が報告する「事例」をもとに進めていく「事例研究」のスタイルで行う。ここで言う「事例研究」とは、臨床心理学が伝統的に行ってきたスタイルをかならずしも意味しない。本演習では、「日常に人間の営み」を照射する臨床教育学の立場から、学校現場で生じているさまざまな事態そのものが「事例」であるという認識似たって、学校現場における生徒と個々のやりとりから、広く学校という人間集団が抱える場の機能に到るまで、裾野を広くとって実践的な議論を行っていきたい。いわば、「学校」がひとつの「事例」であるということができる。

受講者は全員、上に述べた意味での「事例」を提供できることが必要である。

■臨床教育学課題演習Ⅰ（藤川信夫：大阪大学助教授）

この課題演習では、ドイツの教育哲学者 D. レンツェンの 1991 年の著書『フィクションとしての病』をテキストとして、20 世紀末に新たに誕生したいくつかの医療部門あるいはそれに関わる言説の文化的含意（教育学的含意を含む）について考察し、討論を行う。

具体的には、このテキストの章立てに即して、以下の医療部門ないし医療言説を取りあげる。

（1）周産期医療、（2）顎整形外科（歯列矯正）、（3）エイズ言説、（4）体外受精、（5）アンチ・コレステロール・キャンペーン、（6）人工妊娠中絶、（7）死の援助。

そこから、これらの部門あるいはこれに関わる言説の、社会的含意、人間学的含意、宗教的含意について考察する。演習では、受講者に各章を割り当て、レジュメを作成してもらい、これをもとに討論を行う。評価は、演習への参加の度合いと、学期末のレポートをもとに行う。

テキスト：Dieter Lenzen: Krankheit als Erfindung. Medizinische Eingriff in die Kultur. Frankfurt am Main, 1991. なお演習では、担当者による邦訳テキストを主として用い、必要箇所はその都度配布する。

■臨床教育人間学特論Ⅱ（高橋哲哉：東京大学教授）

テーマ「宗教、国家、教育」(Religion, Nation and Education)

デリダの「脱構築」やベンヤミンの「暴力批判論」などの批判的思考は、現代日本において、人間、宗教、国家、そして教育の関わりを考えるためにどのような意味をもつのか。

本講義では、上記のような哲学・思想の遺産を生かしつつ、現代日本におけるⅠ宗教と国家Ⅱ教育と国家の問題を、歴史的かつ理論的な観点から論じてみたい。教育とナショナル

ズム、靖国思想と日本の宗教、思想・良心・信教の自由と教育といった論点について、歴史と現状を踏まえて原理的・哲学的に考察してゆく。講義と討論を織り交ぜながら、これらの問題について各自の判断を練り上げていくことを目標とする。

テキスト：高橋哲哉『教育と国家』講談社現代新書、高橋哲哉『靖国問題』ちくま新書、高橋哲哉『デリダ 脱構築』講談社

■臨床教育学特論Ⅰ（内藤朝雄：明治大学講師）

『いじめの社会理論』で提出された理論から、新たに展開しうる構想について、受講者とディスカッションする。テーマは、例えば次のようなこと及び受講者の提案による。

- ① 隆起一貫型超越性と瀾漫浸潤型超越性というアイディア。瀾漫浸潤型超越性は、コミュニケーション操作系のいじめだけで自殺してしまいかねない思春期女子のグループ畏怖に現れるような超越性である。隆起一貫型超越性は、法や人権や貨幣や神の超越性のようなものである。
- ② 利害図式と全能図式の共形成モデルは、社会学的行為者モデルにおける複数の心的モジュール間の接合モデル一般に用いることができるだろう。この考え方は、合理的選択理論などの地図を塗り替え得るものである。
- ③ 民族紛争とその介入の成功失敗についてのケーススタディの蓄積を、利害と全能の接合面というポイントから再検討し、これからの介入や予防に活用する。
- ④ 「悪魔の生態学的設計主義」を、さまざまな民族紛争のケースに適用する可能性をさぐる。
- ⑤ 移動の活性化によって「日本的経営」と呼ばれる心理社会的な構造が激変したとされている社会現象について、利害と「文化と称される様式」との接合モデルを組んで分析してみる。「文化」と呼ばれているものが、どのように利害構造と接合して存立するかについて有望な理論が成立するかもしれない。
- ⑥ 中長期的改革案を実現するための、移行プロセスや政治的プロセス。
- ⑦ 〈欠如〉からの全能希求モデルを、人々が「無限（どこまでも、どこまでも!）」に取り憑かれる社会を批判的に分析するために活用することができる。
- ⑧ 〈欠如〉からの全能希求モデルは、さまざまな性関連事象に応用することができる。

受講者が集まって議論することで新しい何かが生まれ、それぞれがそれを持ち帰って糧にするといったスタイルでやりたい。シラバスに書いていない、予期せぬ知的収穫を期待できる集まりにした。受講者は、事前に『いじめの社会理論』を読んで、それについてレポートを提出し、終了後、ディスカッションの内容についてレポートを提出する。

テキスト：『いじめの社会理論』（柏書房）。『「ニート」って言うな』（光文社）。『ドメスティック・バイオレンス』（畠中宗一編『自立と甘えの社会学』第5章）（世界思想社）。『ウィニコット』（『現代のエスプリ』420号）